

「自分自身で、物を書く事なんかやめやうと思つたら、さつぱりとやめるんだ。商人にならうと思つたら、その日から前掛をしめればいゝんだ。」

平生から語氣の荒い三田は、酒を飲むと一層それが強くなるのだつた。

「自分の事になつてみると、さう手輕にはいかないのさ。それに女房を持たうか持つまいかといふ問題もある——……。」

松浦は又口籠つた。三田の想像した通り、女の問題に悩んでゐるのだつた。女の問題になると、言葉を濁してしまふのが面白くなかつた。そのくせ第一の問題は、藝術の悩みだと見せようとしてゐるらしいのが、三田は氣に喰はなかつた。

「それも矢張り同じさ。自分が惚れたら貰ふのさ。」

「そんななまやさしい話ぢやないんだ。」

怖ろしく依怙地になつて來た三田を見て、松浦は相手にも何にもならないとい

ふ風に嘆息した。お互の間に出來た距離を忌々しく思ひながら、二人は默然として障子の外の夜を見た。廣い空と、深い水の暗さが、一層二人を寂しくした。ざいと鳴る船の櫓の音が、しやべり止んだ暫時の間、川の面に響いて聞えた。

三田は悔いた。折角友近が、心弱くも人を頼つて來て、一身上の相談をしようといふのに、ふとした心持のゆき違ひから、心にも無い誇張した言葉で、其の場限の意地を張る爲めに、無理解な我儘を云つた事を悔いた。如何かして、此の失敗を、とりかへさなければならぬと思つた。けれどもそれは、意地張の彼にとつては、到底難かしい事だつた。三田は沈黙に堪へられなくなつて來た。

折よく女中が用をきゝに來てくれた。

「お料理はそれ丈で御座りますが、外に何か致しませうか。」

「もういゝや。」

「それでは御酒は。」

「さあ、それももういしてせう。——君はまだ飲むかい。」

川の方ばかり見て居る松浦に言葉をかけた。

「よさう。大分酔つて来た。」

「それではおあいそ。」

三田は女中に勘定を促した。

料理屋を出た二人は沈黙を續けて歩いた。足の早い三田は、思はず知らず二

間先に進んでしまつては、氣が付いて松浦を待った。

「このまゝ下宿に歸つても爲方がないな。」

とつぶやいたが、相手は聞かないふりをしてゐた。

「何處かて飲直さうか。」

如何かしてもう一度、松浦の身の上の問題によりを戻し度かつた。

「ひとつ滅茶々に飲んでしまはふぢやないか。」

三田はやけになつた氣持を、その儘口に出して云つた。

「あゝ。」

松浦は氣の無い返事をした。

「それぢやあ、そつちに行つちやあ駄目だ。反對の方角に行かう。」

さう云つて、三田はくるりと向をかへて歩き出したが、松浦は立停つて考へて

ゐた。

「どうしたんだ。矢張り下宿に歸るのか。」

「實はね、僕は京都に行つて見ようかと思ふんだ。」

云ひ出しにくさうに松浦は答へた。

「これから京都に行くつていふのか。」

三田は思ひも掛けない事だつたので、驚いて詰つた。

「先刻高浦から手紙を貰つた。昨日京都へ来たから、大阪へ行かうと思つたが、それよりも京都で落合はふ。今夜は祇園のある家で待つてゐると云つて来た。」

「高浦つて、あの壯士役者か。」

甚だしく侮辱された氣がして、三田は荒々しい語調になつた。

「それぢやあ君は、先刻から京都に行くつもりだつたのか。」

「さうぢやない。先刻は行くつもりもなかつたけれど、先方では定非逢ひ度いつていふもんだから。若し待つてゐられると氣の毒でもある——。」

「だがもう遅かないのか。」

「いゝえ遅くはない。芝居の稽古が済んでからといふのだから、まあ夜あかしの

覺悟だらう。」

「フウム。」

三田は憤滿に堪へなかつた。自分の態度の悪かつた事を悔て居たのも忘れて、友達の不埒ばかりが考へられた。人の爲めを思へばこそ、心置なく忠告もしてやつたのに、突然京都へ行くなどい、あてつけがましく出た相手を憎んだ。

「爲方が無いや。君が京都へ行くといふのなら、僕はとめない。もと／＼荷物は無いのだから、これから直に行つてもいゝのだらう。しかし明日は歸つて来るだらうね。」

「サア、どうしやうかしら。此方にはもう來ないかもしれない。直に東京へ歸るかもしれない。」

「もう來ないつて。」

三田は友達の意外な強情に、吃驚して問返した。

「さうか、もう来ないのか。そんなら僕は此のまゝ別れたくないね。」
彼はどうかして相手を困らせてやり度かつた。

「これつきり別れなら、もう一度飲直さう。芝居の稽古を済ませてからといふのなら、まだ時間はたつぷりあらあ。君が厭だと云つても飲ませる。又當分逢へないんだ。」

攀拗く口説きながら歩き出した。松浦は何か考へてゐるやうに、黙つて後からついて来た。

三田は、時折友達に連れて行かれた事のある、北の新地のお茶屋に、松浦を連れ込んだ。早足で歩いてゐるうちに、酒の酔はしげくなつて、その家の奥の間に通された時は、息切がして苦しかつた。

「まあ、どなたかと思ふたら、三田さんだつか。お久しぶりおまんな。」
年とつた仲居が出て来て挨拶した。

「酒だ、酒だ。今夜は此の人の送別會だ。」

三田は、傍につまらなうな顔をしてゐる松浦を紹介した。

「へえ、こちらさんは何處ぞ遠方へ行かはりまんのか。」

「なあとに京都に行くんだとさ。二三日前から僕んとこへ遊びに来てゐたのだが。」
一語々々が友達に、あてつけがましく響いてゐる事を、三田は充分承知してゐた。

酒が出て、間も無く藝者がやつて来た。三田はその女達を相手に、埒も無い事を聲高にしやべつたが、松浦は黙つて酒ばかり飲んでゐた。

お互の間の氣まづさから、二人は無暗に飲んだ。三田も松浦も全く酔つた。三

田は呂津があやしくなり、松浦の體はしやんとしてゐる事を許さなかつた。

「こちらはほんまにおとなしうおまんな。」

「おとなしく見せかけてるのさ。その癖人間は悪いんだぜ。小説家だからね。」
側から三田が引取つて答へた。

「小説書かはりまんの。私の事書いて欲しいわ。」
若い藝者は物珍らしさうに云つた。

「僕が書いてやらうか。」

三田は又攀拗く口を出した。

「あんたやつたらやめとこ。」

「生意氣いつてやがら。僕だつて昔は新進作家だつたんだ。失戀の小説なんか、今讀んでも涙が出ら。」

「阿呆らしい。貴方は會社の人やわ。」

「だから昔の話だつて云つてるぢやないか。昔は此の先生と肩を並べた小説家なんだ。何しろ中學校からの友達なんだ。」

何時の間にか話は横にそれて、自分達が一緒に學校へ通つた時代の話を、三田はうるさく話出した。それは藝者に話してゐるよりも、松浦に聞かせ度かつたのだ。昔の友情をはつきりと、自分自身におもひ知らせる爲めにしやべつてゐるのだつた。彼は話に誘はれて涙ぐんで來た。

「なにしろもう、二十年近くちつとも變らない友達は此の人一人だ。」

聞えよがしにくどくどつとつけた。その間松浦は、食臺に頬杖をついて、冷い盃をなめてゐたが、何時の間にか頭は段々低く下つて、坐つてはゐられなくなつてしまつた。遂々しまひには横倒しに、疊の上に寝轉んで、近くにゐた藝者の

膝を枕にしてしまつた。

「チエツ、弱蟲め。寝ちまやあがつた。」

三田は得意になつて、友達の寝姿を尻目にかけてが、その常人も非道く酔つてゐて、胸苦しくて堪らなかつた。彼はおしやべりを止めて黙した。

何時の間にか、藝者は一人減り二人減つて、膝枕をされて困つてゐるのと、舞妓上りのこまつちやくれが残つてゐるばかりだつた。俄に座敷はしんとして、松浦の躰がかすかに聞え始めた。

「姐さん、どないしましよ。枕貫ふて來ましよか。」

「おほきに。私重たうてかなはん。」

目と目で合圖をしながら、若い方の藝者は立上つた。

「よせ、よせ。枕なんか要るもんか。もう直さに京都へ行つちまふんだ。起して

やらう。」

「あなた、よしなはれ。」

松浦を揺起さうとしかけた三田の手は引拂はれた。

「ようやすんでゐやはるのを、起さんかてよろしうおまんが。」

「さうか。それぢやあ寝かして置かう。藝妓はんの膝枕をしてゐりやあ、京都へなんか行かなくなつていゝんだらう。」

「けつたいな人。私いやし。」

藝者はそれを切かけにして、松浦の頭を両手で持上げて、畳の上に下した。

「オイ〜。自分こそ亂暴するない。大切に取扱つてくれ。僕の友達なんだ。子供の時分からの友達なんだ。」

三田は又學校時代からの仲善だつた事を、くどく〜云ひ出した。

「おや〜、やすんではりまんのか。」

入つて来た仲居は驚いて、その場の景色を見た。

「そやつたらな。寢床敷いておよらしてあげまつさ。お風邪引かはつたらあかんよつて。」

「さうか。それぢやあ此の人は君に頼むよ。京都へ行くつて云つてたけれど、これぢやあ到底行かれやしない。」

三田は云ひながら立上つた。

「あんたもお泊りやすな。」

「僕は歸る。明日又あつとめがあるんだ。」

彼は脆ない足取でその部屋を出たが、又ふら〜と戻つて来た。

「いゝかい僕の昔からの友達なんだから。そのつもりで頼むぜ。明日の朝起きた

ら、直ぐにお湯に入れてやつとくれ。」

友達が朝湯の好きな事を想出して、廻らない舌で、うるさく頼んだ。

「よろしうおま。私が引受けたら案じる事おまへんぜ。」

仲居は三田の言葉を避つて答へた。

「さうか、それぢやあよろしく云つておくれ。」

三田は何となく涙ぐましい氣持になつて、自分に背中を向けて寝てゐる友達の顔を覗き込んだ。何時からか軒のやんだ松浦の眼からは、涙が流れて頬を濡らして居た。三田の眼にも、忽ち涙が浮んで来た。彼は胸が迫つて、何も云ふ事が出来なかつた。

「左様なら。」

誰にともなく言葉を残して廊下に出た。

「オヤ、雨かしら。」

格子をあけて出ようとして、彼は空を仰いだ。

「降つてまんのか。そやつたら傘をお持ちやす。」

「いらぬ、いらぬ。ほんの少しだ。」

仲居は臺所の方へ立つて行つたけれど、三田はさつさと往來に出た。存外雨は降つてゐた。大粒のやつが頭から顔を打つて落ちて來た。歩き出すと酔は愈々深くなつた。どきんくと口元迄、苦しさがこみあげて來た。三田は我慢が出來なくなつた。路傍の電信柱につかまつて、口の中へ指を突込むと、ひとたまりもなく大溝の中へ吐いた。したゝか吐いた。吐いて吐いて吐き盡した胸の清々しさに先刻から堪へてゐた涙が意氣地なくこぼれて來た。(大正八年十二月七日)

大正九年十一月五日印刷
大正九年十一月十日發行

日

曜

定價金貳圓八拾錢

著 者 水 上 瀧 太 郎

東京市芝區三田一丁目十三番地

發 行 者 本 多 貞 一

東京市芝區南佐久間町二丁目十番地

印 刷 者 松 永 孫 七 郎

東京市芝區南佐久間町二丁目十番地

印 刷 所 安 全 印 刷 株 式 會 社

東京市芝區三田一丁目十三番地

發 行 所

國 文 堂 書 店

電話 高輪 一三七番
新橋口 芝區 四六九四九番



水上瀧太郎著作目録

處女作

處女作。ものゝ哀れ。ぼたん。うすこほり。嵐。いたづら。

その春の頃その春の頃。途すがら。沈丁花。

心づくし

噂。賢さん。友だち。世の中。心づくし。評議員會。良縁。

海上日記

海上日記。船中。同窓。楡の樹蔭。

旅

情

汽車の旅。大都の一隅。ペルファストの一日。新嘉坡の一夜。霧の都。

大空の下 俱樂部。火事。大空の下。先生。

亞米利加記念帖

紐育リザアブウル。落葉の頃。秋。祭の日。伊太利の女優。ロバートンの一世一代。ファンニイの處女作。久しぶりで芝居を見る記。無名會の「夜の潮」

貝殼追放

新聞記者を憎むの記。八千代集を読む。愚者の鼻息。「その春の頃」の序。購書美談。向不見の強味。先生の忠告。「末枯」の作者。兵隊ごっこ。女人崇拜。永井荷風先生の印象。文明一週年の辭を讀みて。幻の繪馬の作者。泉鏡花先生と早見諒さん。初夢。此の頃の事。妾の子。

日 曜 日 曜。友情。

露光量違いの為重複撮影

10/164

12.8.7

露光量違いの為重複撮影

10/16
164

終